

## 心象風景としての植物描写

—エレン・グラスゴーの『不毛の大地』より—

種子田 香

### 1. はじめに

エレン・グラスゴー (Ellen Glasgow, 1873-1945) は写実主義や自然主義的小説の創作を目指していたが、結局はロマン主義の要素も色濃く残している。本稿では、彼女の代表作『不毛の大地』(1925) の植物描写を読み解くことによって、ロマン主義的要素と写実主義的要素のバランスを取りながら創作活動を行っていた彼女の作風について具体的に考察したい。

グラスゴーは自伝『内なる女』(*The Woman Within*, 1954) の中で、ロマンティックな物語には興味がなく真実を忠実に描きたいと、リアリズム作家を目指して小説を創作してきたと語っている。

I would write, I resolved, as no Southerner had ever written, of the universal human chords beneath the superficial variations of scene and character. I would write of all the harsher realities beneath manners, beneath social customs, beneath the poetry of the past, and the romantic nostalgia of the present. I would write of an outcast, of an illegitimate “poor white,” of a thinker, and a radical socialist. I would take as my theme those ugly aspects of life the sentimentalists passed over. (*The Woman Within* 98)

この自伝がグラスゴーの死後まで待って出版されたのは、当時としては赤裸々な過去の異性関係が記載されていたのみならず、ダーウィンやフロイト、ユングの著書を愛読していたという記述にもあるように、彼女が伝統的な南部人には受け入れ難いような思想を好んで取り入れていたからである。

リアリズム作家を自負していたグラスゴーではあるが、彼女の作品ではロマンスや想像力が風景描写に多大な影響を与えており、プロットの展開にも重要な役割を果たしている。グラスゴーはリアリズムの決定論を取り入れて創作を行っていたが、その一方では登場人物の想像力が物語の展開と密接に関連している。ロマンスとリアリズムが相容れない関係にあることについて、ジョージ・レヴァンは次のように述べている。

Traditionally realism is associated with determinism. The antiromance is the denial of the imagination's power to control circumstance. And thus the characteristic subject of realistic fiction is the contest between dream and reality; the characteristic progress, disenchantment. (Levine 56)

このような先行研究を踏襲したうえで、本稿では『不毛の大地』における植物描写がヒロイン、ドリンダの心情と重なっていることを検証することによって、グラスゴー小説の特徴であるロマン主義と写実主義のバランスについて考察したい。またその植物描写は各部のタイトルになっているメリケンカルカヤ、マツ、ヤマハハコの3つについて見ていきたい。

## 2. メリケンカルカヤ (broomsedge) : 自然との不毛な戦い

『不毛の大地』で繁茂するメリケンカルカヤは、懸命に努力しても好転することのない人生の困難さを象徴する植物である。貧農生活の中で必死にもがき続ける人びとをからめとり、その生活苦から逃れられないように縛り付けている象徴的な存在としてメリケンカルカヤは描かれている。この大地を覆いつくす雑草は、努力によって生活が良くなるという希望を打ち砕くほどに人びとを追い詰め、ついには立ち向かう気力をも失わせてしまう。

At these quiet seasons, the dwellers near Pedlar's Mill felt scarcely more than a tremor on the surface of life. But on stormy days, when the wind plunged like a hawk from the swollen clouds, there was a quivering in the broomsedge, as if coveys of frightened partridges were flying from the pursuer. Then the quivering would become a ripple and the ripple would swell presently into rolling waves. The straw would darken as the gust swooped down, and brighten as it sped on to the shelter of scrub pine and sassafras. And while the wind bewitched the solitude, a vague restlessness would stir in the hearts of living things on the farms, of men, women, and animals. "Broomsedge ain't jest wild stuff. It's a kind of fate," Old Matthew Fairlamb used to say. (*Barren Ground* 3-4, underlines mine)

Partridge はヤマウズラのことで、鷹にとっては格好の獲物であろう。村の人びとが飢饉を恐れながら、そのうちの幾人かには死が待ち受けているように、ヤマウズラの一群も弱った何羽かは追っ手に捕まることが自然の掟となっている。昔からペドラーズ・ミルに住んでいる長老のフェアラムじいさんはメリケンカルカヤを「宿命」と呼び、村の人びとの生活を象徴するメリケンカルカヤはおびえた鳥の群れのような<sup>1)</sup>。村の人びとは変化に対して臆病で、昔からの生活を変える術を持たず、結果的に時代の流れから取り残されている。その元凶であり結果であるのが、いくら刈り取ってもまたすぐに茂って畑を荒廃させるメリケンカルカヤである。自然との闘いに疲れ果て、気力を奪い取られ、何も変えることができない人びとの日常を、グラスゴーが郷愁を排除して描いていることが読み取れる。

メリケンカルカヤは災いをもたらす原因であり、人びとが間違った方向に努力している結果でもあるという両面性を持って描かれていることは注目すべき点である。荒れた土地だから作物が取れず、作物が取れないから効率的に働けずに土地が荒れるという循環する負の連鎖によって、村人は過酷な生活環境を自らの力で変える機会を奪われている。

そのような変化の乏しい村ペドラーズ・ミルに一人の青年が帰ってくることで、ヒロイン、ドリンダの生活は一変する。彼は村の医師グレイロックの息子ジェイソンで、オーストラリアで成長した後にドイツの大学に留学して、父の跡を継ぐべくニューヨークで医師のトレーニングを受け、村に戻ってきた。幼い頃にこの村を離れた彼にとって、ここは決して居心地の良い場所ではなく、彼が身につけた知識や教養を理解してくれる友人はいなかった。彼の父グレイロック医師はアルコールにおぼれ、不適切な女性関係によって家庭生活は破滅していた。ジェイソンは特に父の跡をついで医師になりたいとは思っていなかったが、父の命令に従い、故郷で医師になるために戻ってきた。ジェイソンが村には自分の居場所がないという孤独な気持ちは、以下の引用によく現れている。

“They all talk that way. Half daft, that's what they call anybody who wants to step out of the mud or try a new method. Ezra Flower told me yesterday that Nathan was half daft. No, I want to get away, not to spend my life as a missionary to the broomsedge. I feel already as if it were growing over me and strangling the little energy I ever had. That's the worst of it. If you stay here long enough, the broomsedge claims you, and you get so lazy you cease to care what becomes of you. There's failure in the air.” (*Barren Ground* 114-5, underlines mine)

「メリケンカルカヤに対する宣教師」というのは、アフリカへ布教に行った殉教者のように、ペドラーズ・ミルの生活を豊かにしようといくら努力しても無駄であることを比喩的に表現したものであり、そのような実りのない努力は初めからするべきではないというあきらめの気持ちがジェイソンにも芽生えて、前向きな気持ちを奪い取られていく不安を思わず口に出している。この土地においては人生が駄目になると思い、環境から逃れたいと思う一方で、ジェイソンはすでに身動きが取れなくなりつつあることを自覚している。

そしてまたドリндаや彼女の家族も、メリケンカルカヤがはびこった大地に象徴される村の貧しい生活から抜け出せなくなっており、努力しても報われない日々をおくっている。

Following her mother's glance, Dorinda saw her father's bowed figure toiling along the path on the edge of the vegetable garden. Far beyond him, where a field had been abandoned because it contained a gall, where nothing would grow, she could just discern the scalloped reaches of the broomsedge, rippling, in the lilac-coloured distance, like still water at sunset. Yes, old Matthew was right. What the broomsedge caught, it never relinquished. (*Barren Ground* 124-5)

メリケンカルカヤはまるで意思がある生き物のように、捕らえた人を破滅に追い込み、死に追いやるまで苦しめ続ける。貧困と重労働で人びとは疲れ切って抵抗する気力を失い、厳しい自然に支配されている。同様に、次の引用にもメリケンカルカヤの生命力の強さ、そして人間の無力さが描かれている。

The sun had gone down long ago, and the western sky was suffused with the transparent yellow-green of August evenings. All the light on the earth had vanished, except the faint glow that was still cast upward by the broomsedge. Wave by wave, that symbol of desolation encroached in a glimmering tide on the darkened boundaries of Old Farm. It was the one growth in the landscape that thrived on barrenness; the solitary life that possessed an inexhaustible vitality. To fight it was like fighting the wild, free principle of nature. Yet they had always fought it. They had spent their force for generations in the futile endeavour to uproot it from the soil, as they had striven to uproot all that was wild and free in the spirit of man. (*Barren Ground* 128, underlines mine)

このように第1部では、メリケンカルカヤは人びとを貧しい生活に陥れる原因であり、困窮した生活の象徴になっている。メリケンカルカヤは、人びとが大地を耕し、豊かな農作物を収穫することを阻むものであり、農民にとっては貧困をもたらす害のある存在でしかないと思われている。しかし、この土地でたくましく生い茂るメリケンカルカヤが農民にとっては厄介者であるのは、人びとが土地に合わない農法に固執しているからである。

この村を出てニューヨークで暮らし、科学農法を学ぶことによって、ようやくドリンドはメリケンカルカヤを牛の飼料として利用できることに気が付き、農地としては役に立たない土地を放牧地として活用し、酪農業で成功していくことになる。

### 3. 松 (pine) : 資産の継承

『不毛の大地』でしばしば描写される大きな松の木は、何十年もかかって成長し、先祖から受け継いだ唯一の資産であった。松の木が大きく成長するためには、その土地の所有者が木の成長を見守ってきた長い時間が必要であった。第2部では、「松の木」が先祖から受け継いだ資産として描かれていることから、ドリンドが松の木に対して特別な気持ちを持って接していることに注目したい。大きな松の木は、ドリンドの所有する荒廃した土地において唯一の金銭的価値があるものであり、先祖から受け継いだ農地を守り続けてきた証拠にもなっている。窮乏をしのぐのに木を伐って収入を得ることが頭をよぎるが、木が大きくなるのに費やした時間に釣り合う利益が得られるとは思わないことから、伐採に反対している。

松の木は老いたドリンドの父親の姿と重なり、金銭的には報われなかった彼の労働の中で、唯一価値あるものと思われていた。父親は死ぬ間際までその松の大木が見える場所にベッドを置き、自分の人生と松の木を重ね、心の拠り所としていた。家族は昔、メイン州に住んでいて、The Pine Tree State というニックネームのとおり松の森林が生い茂る中で生活していたので、松は家族の歴史を振り返らせてくれる木だった。

“Sometimes in stormy weather that pine is like a rocky crag with the sea beating against it,” Dorinda said. “I used to remember it up in Maine. I suppose that is why Pa likes to look at it. All the meaning of his life has gone into it, and all the meaning of the country. Endurance, that's what it is.” (*Barren Ground* 273)

風雨にさらされながら大きく成長した松は、耐え偲んで生きてきた父親の姿、ひいては農地で働く村人の姿と重なり、忍耐を象徴しているとドリンドには思われた。土から生まれて土に返っていく循環する命というキリスト教的な死生観が表れている<sup>2)</sup>。父の葬式の場面では、彼の死は「木が倒れ朽ちて土に返るのと大差ない」(『不毛の大地』220)と父と松の木が同一視されている。

農業に携わるようになって、ドリンドは父親のたゆまぬ努力に対して哀れみと尊敬の念を持つようになっていった。そしてそれは祖先が残した森林を守らなければならないという気持ちにつながる。一旦、木を伐採してしまうと、何十年もかけて成長した木は元の姿に戻ることはない。「私にできる限り森林をこのままにしておかなくては」(『不毛の大地』225)と言って、入り用ではあるのを我慢して木を守ることは、先祖が残してくれたものを大切にしたいという気持ちの表れであろう。このように松の木は、父の忍耐強い労働、さらには先祖から自分に託された資質や才能を意味するものへと意味が拡大している。

また、pine は名詞では「松の木」であるが、動詞としては「思い焦がれる」という意味であって、この動詞としての意味は、ドリンドの夢を例にあげて見てみたい。ドリンドはジェイソンとの別れを経験した後、昼間は農場で働きつめで他のことを考える余裕がないが、夜になって休んでいるとかつての気持ちが夢になって蘇ってくる。

As far as she could see, on every side, the field was filled with prickly purple thistles, and every thistle was wearing the face of Jason. A million thistles, and every thistle looked up at her with the eye of Jason! She turned the plough where they grew thickest, trampling them down, uprooting them, ploughing them under with all her strength; but always when they went into the soil, they cropped up again. Millions of purple flaunting heads! Millions of faces! (*Barren Ground* 245)

ジェイソンとの恋愛の破綻によって負った精神的な傷は、ドリンドに大きな爪痕を残し、年月が過ぎてもまだその屈辱感や世間体の悪さが思い起こされ、彼女をさいなむ。潰してもまた生えてくるアザミにジェイソンの目がついているということは、ジェイソンに過去の秘密を握られていてそれを暴露されるのではないかという恐怖に縛られていることを物語っている。しかし、キリスト教の寓話でしばしば赤毛が裏切り者のユダを暗示し、赤毛のジェイソンがドリンドを裏切るように人物の性格付けをされていたが、ここでは頭が紫色に変化していることに注目したい。つまり、ジェイソンに対するドリンドの感情は、血の出るような痛みや苦しみが時間とともに癒され、傷口が紫色のかさぶたにかわり、痛みも思い出へと変わったことを示唆している<sup>3)</sup>。夢の中でだけ過去の思い出がよみがえり、毎日の重労働を支える力になっている。

このように、第2部の **pine** では「松の木」と「思い焦がれる」という意味の両方が含まれていて、村や家族の歴史といった公的な場面に、親子関係や恋愛の傷といったドリンドの内面的な物語が挿入されている。

#### 4. ヤマハハコ (Life-everlasting) : それでも生活は続く

第3部のタイトルであるヤマハハコはキク科のドライフラワー用に利用されるハーブで、薬用として健康促進や美容の目的で使用されていることから、ここでは自然を利用する知恵がヒロインを立ち直らせていくことを言外に意味している。傷心を負ったあとも夜には眠り、朝には食事をとり、いつもとかわらない日常生活は続いていくが、そのように時間をかけることでドリンドの傷が少しずつ癒されていくことをタイトルは物語っている。

かつては危うく銃で撃ち殺してしまうほどまでに憎んだジェイソンであったが、彼を看取ることによって、ドリンドは過去の自分とも和解していく。ドリンドが彼を引き取って看病し、その衰弱を見守ったことはジェイソンにとっては屈辱的なことであったが、彼にはもはや恥を感じる感覚もなく、あたかもドリンドに対して行った過去の裏切りもすっかり忘れてしまったかのようになり、ジェイソンは死が近いことを予感させる。このような病身の彼を介護することは、ドリンドにとっては勝利を味わうことであり、自分の手の中でしか生きられないジェイソンへの哀れみによって憎しみから解き放たれることができた。かつてピストルの銃口を向けて復讐しようとしたのとは別の方法で、相手の命を手中に収め、優位な立場にあるのだ。ドリンドにとってジェイソンの介護とは、愛情だけではなく、復讐や哀れみという側面もあり、自らの心の傷を癒す行為であった。そのジェイソンが死を迎えたとき、彼女は仕事を続けて自立した生活が営めることに感謝し、自分の歩んだ道が正しかったのだと感じる。ドリンドはジェイソンを見送って、すべきことをやり遂げられたという安堵の気持ちと、青春時代から完全に切り離されてしまったという寂しさも感じている。

Turning slowly, she moved down the walk to the gate, where, far up the road, she could see the white fire of the life-everlasting. The storm and the hag-ridden dreams of the night were over, and the land which she had forgotten was waiting to take her back to its heart. Endurance. Fortitude. The spirit of the land was flowing into her, and her own spirit, strengthened and refreshed, was flowing out again toward life. This was the permanent self, she knew. (*Barren Ground* 524)

忙しく働くうちに心の痛みはやわらぎ、自分が成し遂げた経済的な成功を味わう実りの時期を迎えることができる。ドリンダは酪農業で成功しただけではなく、生乳から品質の高い乳製品を生産し、その商品を都会のホテルなどに売るビジネスでも成功した。彼女にとってジェイソンとの恋愛の破綻は、人生の後半で実り多い時間を迎えるためのきっかけに過ぎなかった。彼女の前半生は修復不可能だと思えるほど絶望的だったが、その辛い経験は人生を好転させるきっかけになっていたことに気づき、時間をかけて自然と調和して生きることによってようやく過去の後悔から立ち直ることができた。

グラスゴーの描くヒロインの気持ちは植物描写から読み取ることができ、風景は単に現実の世界を描いているだけではなく、登場人物たちの生い立ちや心情、また歴史の中の人物の立ち位置などを示している。『不毛の大地』における植物描写は、写実主義的に現実をありのままに映し出すこともあれば、ロマン主義的に人物の気持ちを表現していることもあり、両方のバランスを保ちながら作品を創作していた作者の意図を読み取ることができる。

## 5. おわりに

グラスゴーは決定論を取り入れて自然主義的な作品を創作しようとしていたと論ぜられているが、グラスゴーの作品をジャンル分けすることは難しい。植物の色や香りといった自然の描写までもがヒロインの心情に影響を受けている点では、現実をありのままに描いたとは言えず、想像力が写実主義を妨げていることは明らかである。

メリケンカルカヤをはじめとする植物は意思のある動物のように人間の支配を拒み、人間は与えられた環境を変えることができない。人びとはヴァージニア州の乾燥した荒地から農作物を収穫しようと格闘し続けたが、自然を支配して生活を豊かにすることはできなかつた。その土地で生かされている者たちは、自然に合わせて自らの生活様式を変えていくしかなく、人間は自然と調和して生きていくことでしか大地から恩恵を得ることができないということをこのことは物語っている。ドリンダは近代的農法を専門家から学び、土地の特性を生かした酪農へと切り替えなければならないことに気が付いた。そこで、荒地にはびこるメリケンカルカヤを根絶やしにするのではなく、家畜のえさとして有効に活用することにした。雑草が繁茂した土地は牛の生育に欠かせないので、放牧場として活用してこそ価値が生まれたのである。

心象風景としての植物描写を考察するとき、『不毛の大地』の写実主義はその定義から逸脱しており純粋な写実主義とは言えないように思われる。しかし、これらの心象風景が映し出している人びとの心のあり方が単なる空想となっていないのは、グラスゴーがその土地の歴史や特性を熟知して創作したためであり、想像力によって生み出された自然描写ではあるが、作者がよく知っている身の回りの事実を観察し演繹した結果、生み出されたものであるため、事実に基づいているとも言うことができる。つまり、グラスゴーの植物描写を読み解くことは、グラスゴーが写実主義とロマン主義のバランスをとりつつ作品を執筆していたということを再認識させてくれるのである。

※ 本稿は、エコクリティシズム研究学会（平成 30 年 8 月）での口頭発表原稿に加筆・修正を行ったものである。

## 注

- 1) Fairlamb という名前からも、課せられた宿命をおとなしく受け入れている性格が示唆されている。このように、名前から性質が暗示されている点からも、リアリズムからの逸脱が見られる。
- 2) 旧約聖書の創世記で「灰は灰に」という神の言葉があり、聖書の影響が散見される。
- 3) 色がそれぞれの意味を暗示することもグラスゴー小説の特徴であり、ロマン主義的であるといえるであろう。

## 参考文献

- Glasgow, Ellen. *Barren Ground*. 1925. San Diego: A Harvest Book, 1985.
- . *The Woman Within: An Autobiography*. 1954. Charlottesville: UP of Virginia, 1994.
- Levine, George. *The Realistic Imagination: English Fiction from Frankenstein to Lady Chatterley*. Chicago: U of Chicago P, 1983.
- Manning, Carol, S., ed. *Female Tradition in Southern Literature*. Urbana: U of Illinois P, 1993.
- McDowell, Frederick P. W. *Ellen Glasgow and the Ironic Art of Fiction*. Madison: U of Wisconsin P, 1963.
- Matthews, Pamela, R. *Ellen Glasgow and a Woman's Traditions*. Charlottesville: UP of Virginia, 1994.
- Sawaya, Francesca. "The Problem of the South: Economic Determination, Gender Determination, and Genre in Glasgow's *Virginia*." *Ellen Glasgow: New Perspectives*. Ed. Dorothy M. Scura. Knoxville: U of Tennessee P, 1995. 132-45.
- Scura, Dorothy McInnis. "Barren Ground: Ellen Glasgow's Critical Arrival (Introduction)" *Mississippi Quarterly* 32 (1979) : 549-52.
- . *Ellen Glasgow: New Perspective*. Knoxville: U of Tennessee P, 1995.
- . *Ellen Glasgow: The Contemporary Reviews*. Knoxville: U of Tennessee P, 1992.
- エレン・グラスゴー『不毛の大地』板橋好枝他訳 荒地出版社 1995年。
- 徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』講談社選書メチエ、2006年。

